

論文

継続飼育体験を通して保育学生が学んだこと

榎戸 裕子

1. はじめに

教育・保育現場での動物との触れ合いや飼育により、子どもたちのなかに優しさ・思いやりや命を感じる心が育まれるなど、動物飼育には多くの教育的効果がある。このことは様々な分野で研究されている。たとえば中島、中川、無藤（2009）は、鳥・哺乳類の飼育を通して学校適応や他者への思いやりが育まれるといった効果があることを実証している。言葉と話さない動物に触れて、その気持ちを察することが、自分と立場や考えの異なる他者の気持ちを察することにつながるというのが中島・中川・無藤（2009）の結果からもうかがわれる。特に幼児期には、保育者のもとで生き物や動物との直接的な触れ合いを通して、様々な感情体験を共有しながら、愛着を抱き相手を思いやる気持ちを育ませ、「命」との関わりを深めていく体験が必須であると考えられる。このとき、保育者が生き物や動物に愛情をもって関わり、その様子に子どもたちが触れることが重要である。宮川保（2006）は、指導する側が動物を本当にかわいいと思う気持ちをもたない限り、子どもたちにその気持ちは伝わりにくいものと考えられると述べている。

2017年度に改訂され、すでに実施されている「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の領域「環境」（以下、「要領・指針」と表記する）では、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」と明示されている。

本研究に先立つ筆者の研究（榎戸，2018）では、保育現場での「身近な生き物との関わり」をテーマにした取り組みをしてきた。この取り組みでは、子どもたちの発達段階に合わせてステップを踏みながら、子どもたちが「命」と関わるという体験を深められるような場をつくってきた。ステップ1として、年少児はダンゴムシやアリとの園庭などでの触れ合い、ステップ2として年中児はアオムシやザリガニの継続飼育、ステップ3として年長児ではウサギの継続飼育と、発達に応じて変化させることで、子どもたちが自発的に生き物と触れ合い、発見や交流を深めていくように配慮した。こうして、子どもたちの発達段階に合わせて、園庭で出会う生き物から動物の飼育までステップを踏んで、子どもたち

が身近な生き物と関わる機会を深めていった。

その結果、筆者は、保育者に必要とされることとして、主に2つのことを明らかにした。第一に、子どもたちが生き物や動物に触れることを保育者が大事にし、保育者自身が愛情をもって生き物や動物に親しみ、子どもたちに「命」に触れ合える環境を提供できるという点である。第二に、保育者が、保育活動の中で生き物や動物との触れ合いが、「命」との関わりを深めていく大切さや必要性を自覚することが大事だという点である。これらの結論から、保育者養成校において、子どもたちが生き物や動物に関わって「命」の大切さを伝えていけるような保育者になることを目指す必要があるということが示された（榎戸、2018pp.171-187）。

そこで、保育者養成校の保育科に通う学生を対象にしたゼミナール（以下、「ゼミ」。本学では「教職実践演習（幼稚園）」として開講されている）の授業の中で、生き物との触れ合い、飼育する取り組みを試みることにした。シラバス作成段階では、子どもたちの発達段階に合わせて保育現場で実践してきたステップ、すなわちステップ1（年少児：ダンゴムシやアリとの園庭などでの触れ合い）、ステップ2（年中児：アオムシやザリガニの継続飼育）、ステップ3（年長児：ウサギなどの体温を感じることでできる動物の継続飼育）というステップ順に従って、少しずつ生き物との触れ合いを深めていくというプログラムを準備した。このゼミの授業全体のねらいは、授業展開の方法を工夫することで、どの学生も生き物や動物の世話や触れ合うことを通して、卒業までに、子どもたちに生き物や動物に愛情をもって関わり、「命」の大切さを伝えていけるような保育者の資質を引き出す、ということである。

本研究では、保育者養成校での生き物や動物との触れ合いをテーマにしたゼミの授業内容を報告し、授業のねらいの達成度を評価するとともに、学生が生き物や動物との関わりを深め、愛着をもち相手を思いやる気持ちを抱くようになるプロセスを検討し、今後の可能性と課題を明らかにしていく。

2. 研究目的

本研究の目的は2つある。第1に、愛情をもって生き物や動物に親しみ、子どもたちに「命」に触れ合える環境を提供できる保育者を養成するために、保育者養成課程での継続動物飼育の取り組みを通して、どのような成果と課題があるかを検討する。第2に、その考察の結果を踏まえ、今後のゼミでの授業に活かすための方策を検討する。

この研究目的を達成するために、本研究では、次の3つの問題を提起する。

- ① 学生が動物との触れ合いや世話を通して、保育者を志望する学生に必要な「命」と向き合うという経験をどのような方法で進め、達成したのか。
- ② この授業を通して、学生にどのような変化が見られたのか。
- ③ 実際の授業展開によって、方法がどのように変化したのか。

これら3つの問題を検討することを通して、この授業の意義と課題と可能性を明らかにする。

3. 研究方法

保育者に求められている第1と第2のことから、保育者養成課程で学生に伝えていく授業を展開し、意義と課題と可能性を検討する。

研究対象は、保育者養成校に在籍しているゼミの受講生である。ゼミは、「教職実践演習（幼稚園）」の位置づけで、各専任教員がそれぞれのテーマをもち、学生8～10名で1年間活動している。

調査期間は、平成30（2018）年度4月から11月までである。ゼミのテーマは、「命を感じる教育」である。授業全体のねらいは、保育者養成課程の中で、学生が「命」の大切さを実感し、子どもたちに、生き物や動物との触れ合いを広げていくことができる学生を育てることである。学生には、授業の目的として、①生き物や動物との触れ合いを通して、知識を広げたり、命の大切さを実感したりする。②教職実践演習の仲間を大事し、みんなで協力しようとする。③コミュニケーションを図り、親睦を深める。の3つを示したが、このうち本研究のテーマに直接関連するのは①である。本研究では、この①を達成するための授業展開の方法を検討する。

シラバス作成段階でのゼミの授業実施計画は、子どもたちの発達段階に合わせて保育現場で実践してきたステップ順に則り、年少児で実施したステップ1のダンゴムシとの触れ合いから始めて、年中児のステップ2（アオムシやザリガニの継続飼育）、年長児のステップ3（体温を感じることでできる動物の継続飼育）の順で実践するという予定であった（榎戸，2018）。

毎回ゼミの授業後に作成したゼミ活動記録を基に、本研究では毎回のゼミの内容と学生

の言葉や行動を抽出して短いエピソードにまとめる。日付とともに挙げるゼミの通算回数は、学外合同ゼミや附属幼稚園見学会などカリキュラムの上ではゼミの時間に割り当てられている他活動のための回を除いた回数である。

4. 事例と考察

4.1 事例1 ダンゴムシとの触れ合い

(1) ゼミでの学生の活動の様子

事例1-1 平成30(2018)年4月15日 前期第2回

ゼミ生8名の前に、ダンゴムシ約30匹が入っている飼育ケースを出すと、見たり触ろうとしたりする学生もいたが、気持ち悪がり拒絶反応を示す学生もいた。皆で生態を調べてえさやりをしたが、一向に興味・関心は高まらず、ほとんどの学生は自ら触ろうとしなかった。

事例1-2 平成30(2018)年5月14日 前期第3回

ダンゴムシの習性を利用した迷路作りに挑戦すると、面白そうにダンゴムシ迷路遊びを展開していく学生もいたが、気持ち悪がりダンゴムシから目を逸らす学生もいて、大きな差が見られた。

(2) 教員による授業の振り返りと授業計画の検討

拒絶反応を示した学生たちの抵抗感が強く発展性が見られなかった。子どもたちなら、ダンゴムシの「命」との関わりもスムーズに入ることができたが、学生の生まれ育った環境や今までの生き物や動物の飼育体験など、大人の独特な問題が生じてくることが考えられた。そのため、授業実践方法を検討する必要があると考えた。

そのため、教員は、子どもたちの発達段階に合わせてステップを順に進めるのではなく、子どもの発達段階と反対にステップ3から実践を試みることを検討した。もしかすると拒絶反応を示した学生たちも温かみのある動物ならば受け入れることができるかもしれないと考えた。

ステップ3の年長児たちは、4匹のウサギを対象に継続飼育したが、大学という限られた環境や飼育する場所は教員の研究室であることを考慮し、体温を感じ反応を返してくれる哺乳類として、人にもよく慣れるハムスターをゼミで飼育することとした。

（3）考察

この事例で示されたのは、保育現場の子どもたちと短期大学の学生との違いである。子どもたちならば、園庭で誰にでも見つけることができ、小さくて手の平にのるダンゴムシは最適であったが、学生たちは、拒否反応が見られ抵抗感が強く発展性が見られなかった。そこで教員は保育現場で実践してきたステップ順を見直して、これとは反対に、ステップ3のハムスターからステップ1のダンゴムシへと進むように授業計画を変更することにした。

4.2 事例2-1 ハムスターとの触れ合いの開始

（1）ゼミでの学生の活動と様子

事例2-1 平成30（2018）年6月10日 前期第4回

ハムスターのケージを前に出すと、「可愛い」と言って、自ら近寄る学生がほとんどであり、抵抗なく触る学生もいた。

ダンゴムシに拒否反応を示した学生は、ハムスターにも目も合わせたくないと遠ざけていたが、友達が笑顔で触れている姿を遠目から見ることはできていた。

（2）教員による授業の振り返りと授業計画の検討

ほとんどの学生は、ダンゴムシの反応とは全く違う姿を見せた。目を輝かせて観察したり、積極的にえさやりをしたりしていたため、教員はステップ3の温かみがあり反応のあるハムスターから試みたことは、学生にとって興味・関心をもちやすいと考えた。

ダンゴムシに拒否反応を示した学生はハムスターにも興味を示さなかったが、周りの友達が「かわいい」と言って触っている姿を見ることはできていた。そのことから、教員は学生の中に苦手だが気になる存在という心情の変化を感じ取っていた。そこで、ハムスターに興味を示さない学生にも、何らかの自然な形で触れることが必要であると教員は考え、「飼育当番」を決めて学生が順番にハムスターの世話をを行うという活動を導入することとした。ゼミ生8名に、2018年9月25日（火）から10月29日（月）までの約1か月間の平日に飼育を任せるという話をし、学生のあいだで飼育方法を話し合わせた結果、担当学生2名が曜日毎に昼の時間帯を利用し世話をすることになった。

(3) 考察

子どもと学生の違いを踏まえて、ステップ3から再度始めることで、多くの学生が抵抗なく動物と触れ合うことができたことがわかる。教員の計画変更が妥当性をもつことが示され、学生は体温を感じることで動物の飼育から入ることで抵抗感が低くなることがわかった。

4.3 事例2-2 ハムスターの飼育

事前に授業で、世話のために必要な知識を学習し、ハムスターに名前を「えっちゃん」と名付けた。ハムスターの隣にダンゴムシも置き、視野に入るようにした。また、学生が飼育体験をしている前で、教員がダンゴムシにえさやりをする姿を見せることにした。

(1) 学生の変容

表1. 2018年度後期 教職実践演習での学生の姿（黒枠は「飼育当番」の学生の姿である）

期 日	学生の姿
9月25日（火） ～10月1日（月） 飼育当番1回目	<ul style="list-style-type: none"> ・「目が可愛い」と声掛けする子もいたが、無言で淡々と世話をする子もいた。 ・「おしっこが臭い」と言って、顔をそむける子もいた。 ・寝ているにも関わらず「抱っこしたい」と起こし、無理矢理に抱っこをする子がいた。 ・当番を忘れてしまう子もいた。 ・ダンゴムシをちらりと見る子もいたが、「たくさんいて気持ちが悪い」と近寄らない学生がほとんどであった。
10月1日（月） 後期第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中に写真撮影があり、フラッシュを浴びた後、ハムスターに落ち着きがなくなったのに気づき、「フラッシュがいけなかったのか」「初めての人が来たから、びっくりしたのかな」「男の人が苦手なのかな」と心配する言葉が聞かれた。
10月11日（木） 飼育当番	<ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼ぶだけではなく、「えっちゃん、水を替えるよ」「えさをあげるからね」と、今から行うことを声掛けしてから行動に移す学生がいた。

10月15日(月) 後期第4回	・11日のことを授業で取り上げ、ハムスターの気持ちについて話し合った。「声を掛けた方が安心する」「嬉しいと思う」「自分たちも前もって名前を呼んでもらった方が嬉しい」と意見が出た。
10月16日(火) 飼育当番	・初めて砂のトイレで尿をしている姿を見たと感動していた。
10月9日(火) ～10月15日(月) 飼育当番3回目	・全員が、ハムスターに声掛けをしてから行動に移すようになってきた。苦手意識の強い学生も、頭を撫でることができるようになり、「ふわふわしてる」と目を輝かせて話すようになった。 ・ダンゴムシを時々は見るが、相変わらず、興味はなさそうである。
10月22日(月) 後期第5回	・大学祭のハムスターの出番について話し合うと、学生から、「出しっぱなしはかわいそう」「疲れると思う」「落ち着きがなくなるとストレスになる」という意見が出て、時間を区切ることになった。
10月24日(水) 飼育当番	・当番二人が新聞紙をちぎりながら、「大きいと口の中に入れにくいよ」「あっそうか、小さくしないとね」と言いながら、小さくちぎり、ケージに入れていた。 ・「ヒマワリの種は沢山食べると太るから3個だよ。ダイエットだよ」と言いながら、えさ入れに入れていた。
10月29日(月) 飼育当番	・苦手意識の強い学生が「当番だった。ごめん」と慌てて15時に来る。もう一人の飼育当番が世話をしてくれたことを伝え、自分から触りたいと初めて言い、触りながら謝っていた。「どうして触りたいの」と聞くと「気持ちがいいから」と答えた。
11月1日(木) 大学祭前日	・大学祭の準備で、ダンゴムシを3つの透明ケースに分ける時飼育ケースの中で、ゾウリムシが走り回っているのを発見する。「あっ、ダンゴムシがやられる」「このキュウリはダンゴムシ用なのに」「ダンゴムシはゆっくりしか歩けないし」「このゾウリムシ野郎」「ゾウリムシにやられて、ダンゴムシの数が少なくなるのでは」と心配する声が聞かれた。

11月3日（土） 大学祭当日	<ul style="list-style-type: none"> ・ハムスターのことを気に掛ける。来訪者の子どもたちの様子を見て「あの子どもたち、触りすぎ」「疲れちゃうよ」と心配する声が聞こえてきた。「立って抱こうとしている小学生がいたから、近くに行って声を掛けたいわ、ドキドキした」と見守る声も聞こえてきた。 ・早めに来訪者から見えない場所に移動させていた。
11月5日（月） 後期第7回	<ul style="list-style-type: none"> ・大学祭後、ダンゴムシの3ケースを自然に返す予定だったが、「2ケースを自然に返して、1ケースは部屋で冬眠させよう」という意見に全員が賛成し、1ケースは部屋に置くことになった。それからは、ハムスターの次に時々覗くようになった。
11月5日（月） 授業外の時間	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手意識をもっていた学生とその友達の2人で訪れる。ハムスターのトイレが汚れているのに気づき、友達が急いで世話を始めた。それを見ていた苦手意識をもっていた学生も自らハムスターの頭を撫でた。友達が「あんなに嫌がっていたのに、こんなに変わったのは初めて見た」とびっくりしていた。

（2）教員による授業の振り返りと授業計画の検討

飼育を始めた1週間目は、学生の中に淡々と世話をしている様子が見られ、中には自分本位に抱こうとしたり、糞尿の始末を嫌がったりする姿も見られた。しかし、飼育当番を重ねていくと、「えっちゃん、今から抱っこをするよ」「新聞紙を口に入れやすく小さくしないとね」などと名前を呼んでから行動に移す姿が見られ、相手の立場に立っての発言が聞かれるようになった。そのため教員は、学生が継続的にハムスターに触れることを通して、確実に、愛着が生まれ始めていることを実感していた。これに関連した変化は、ハムスターの飼育ほどではないが、ダンゴムシとの関わりにも見られるようになった。

ダンゴムシを飼育している箱の中に多くのワラジムシ（別名ゾウリムシ）がいることを見つけ、ダンゴムシの味方になり気にするような学生たちの姿が見られた。このことから教員は、学生が意識はしていないが、自然にダンゴムシを受け入れていると考え、学生とダンゴムシの関わりにも注意を払うようになった。

飼育担当を曜日で2人当番制にし、昼の休憩時間に世話をするという方法で1人5～6

回行ったが、曜日毎であったため学生の1日のリズムの中にハムスターの世話をする時間が組み込まれてなかった。そのため、学生の中には当番を忘れてしまったりハムスターの日々の変化に気付きにくかったりする人もいた。教員は、飼育方法の見直しが必要であると考えようになった。しかし、この年度内では、冬を迎える時期になり、飼育方法の見直しを実施することはできなかった。

（3）考察

この事例で注目すべき点は、ハムスターに苦手意識をもち直視できなかった学生は、周りの友達の影響もあり、生まれて初めて触るという体験を通して、毛がふわふわしていて気持ちがいいという発見をしていることである。生き物や動物に触れ合うカリキュラムをステップ1から始めたことを見直して、あらためてステップ3から開始し直したことによって、このような変化が学生の中に見られたといえる。この学生は、その後、忘れがちであった飼育当番を真面目に行うようになり、飼育当番以外の時間帯にもハムスターに会いに来るようになった。この変化は一時的なものではなく、その後もこの学生は飼育を嫌がらずに行うなど着実に変容が進んでいる。ハムスターとの関わりで見られたこの変化は、当初多くの学生が拒絶的だったダンゴムシとの関わりにも影響を及ぼしている。学生はステップ3からステップ1に確実に進んだといえる。

5. 成果と課題

5.1 事例（1）卒業生A（専攻科生）へのインタビュー調査

本学保育科専攻科に進学した卒業生Aに5項目について直接面接によるインタビュー調査（半構造化面接）を実施した。実施日は、平成31（2019）年10月24日である。

表2. 卒業生A（専攻科生）へのインタビュー調査結果（太字は半構造化面接の質問項目）

①	ダンゴムシとの最初の出会いはどのように思いましたか。 何をするのだろう、久しぶりのダンゴムシだが、見るだけならいいが触りたくない。自然に触れる子を見て「すごいな、自分にはできない」と思った。
②	ハムスターを見てどのように思いましたか。 「かわいい」と思ったけど、見ているだけでいい。いきなり触ると噛まれるかもしれないし、爪が痛いかもと思った。触り方もわからない。

③ ハムスターの飼育の過程で、気持ちの変化がありましたか。

「先生は何で好きな食べ物を知っているのだろう。どうしておしこの場所も知っているのかな、ずるいな」「ハムスターに寄り添っているのかも」と考えた。先生の手の平に乗っているハムスターは嫌がらない。自分の手の平に乗せると震えている時があった。声掛けの違いなのか、慣れれば嫌がらないのかなどと考えた。いつのまにか自然に触れることができるようになっていた。

④ 自分が変わったなと思う出来事がありましたか。

教育実習時の出来事である。園児と園庭に出た時、男の子が「はい」と言って手渡してきたダンゴムシを手の平に乗せたら、クラス担任が「先生、触れるんですね」と言った。それからは毎日のように園児たちからダンゴムシ探しの誘いがあった。いつのまにか園児と一緒にダンゴムシを探すことが楽しくなっていた。葉の下や湿った場所を好むことを知らせると、ダンゴムシのことをよく知っている生き物先生ということで、園児たちが積極的にダンゴムシや他の生き物についても話してくるようになった。

⑤ 今は、生き物との触れ合いをどのように考え、今後、子どもたちにどのように関わっていきたいですか。

現在、園で保育補助をしており、ウサギやインコ、アゲハの幼虫やザリガニを飼っている。子どもと一緒に触れ合い、生き物や動物の気付きや発見を受け止めている。生き物の立場に立って生き物の気持ちを声に出したい。その子にとって生き物の前が落ち着ける場所であるならば見守りたい。興味があって見ているのなら、関わり方を見たい。なにより、ダンゴムシを最初は嫌だったけど、実習園で触れたことをクラス担任に「触れるんですね」と言われたことが嬉しかった。また、ゼミでハムスターに拒否反応を示していた友達が「ふわふわしていて気持ちがいい」と触れるようになったことを見て、時間がかかるけど人は変わることができるということがわかった。これからも「命」に触れる保育をしていきたい。

5.2 事例(2) 卒業生B(新任)へのインタビュー調査

卒業生Bは幼稚園に就職し、現在4歳児のクラス担任をしている。電話によるインタビュー調査(半構造化されたインタビュー)を実施した。実施日は、平成31(2019)年10月24日である。

表 3. 卒業生 B (新任) へのインタビュー調査結果 (太字は半構造化インタビューの質問項目)

①	<p>ダンゴムシとの最初の出会いはどのように思いましたか。</p> <p>懐かしいな、幼稚園の時に触っていたなと思った。</p>
②	<p>ハムスターを見てどのように思いましたか。</p> <p>初めてのハムスターだったけど、小さい時に触りたいと思っていたことを思い出で触った。「かわいい」と思った。</p>
③	<p>ハムスターの飼育の過程で、気持ちの変化がありましたか。</p> <p>「えっちゃん」の好みのえさやうんちに変化が見られて、生きているなと思った。何回か飼育当番をして関わりが深まってくると可愛さが増した。</p>
④	<p>自分が変わったと思う出来事がありましたか。</p> <p>担任になった4月当初、ゼミで生き物の世話や命について学んだことを活かそうとザリガニの飼育を試みたが、すぐに死んでしまうことが続いた。</p> <p>子どもたちやザリガニのためにも、長生きさせるためにはどうしたらよいか、自分なりに考えたり調べたりして生態を学び、一生懸命に飼育したことである。</p>
⑤	<p>今は、生き物との触れ合いをどのように考え、今後、子どもたちにどのように関わっていきたいですか。</p> <p>幼稚園の担当クラスの子どもたちと一緒にザリガニや金魚を育てている。子どもたちが持ってくるカタツムリやカマキリも大事に育てようという気持ちで世話をしている。</p> <p>今後も、子どもたちが興味・関心をもっている生き物を子どもと一緒に大事に世話をしたい。動物の死を経験することもあったが、生まれてきた生き物はやがて死ぬということもタイミングをとらえて知らせている。死んだウサギを触った時に「寝ているだけではないね」「今まで遊んでくれてありがとう」と言ってお花をお供えした。このような「命」に触れる環境をつくり大事にしていきたい。</p>

5-3 成果と課題

2人の卒業生のインタビュー調査より、学生時代のゼミの授業実践当初の姿と比べて大きな変容が見られたことがわかった。表2の卒業生Aは、最初はダンゴムシを触りたくないと言っていたが、子どもを介して触ることができ、保育補助をしている園では生き物先生と呼ばれるようになった。また、動物に対して苦手意識の強かったゼミの友達の変容

を目の当たりにしたことで、人は変われるという思いで、子どもたちに生き物や動物と丁寧に関わっている姿を見せたいと思うようになっていった。表3の卒業生Bは、子どもたちや生き物のために、生き物を長生きさせるためにという思いで生態を調べ、生活しやすい環境づくりや「命」に触れる環境づくりなど、丁寧な飼育を心掛けていた。

卒業生2人へのインタビュー調査を通じて、学生時代のゼミでの活動を通して、特にハムスターに興味・関心をもち関わりを深めることができ、ダンゴムシにも親しみを感じるようになっていくという心の変化もあったことがわかる。そこから、ゼミにおいてステップ1のダンゴムシに触れる体験からのスタートをステップ3の温かみがあり反応のあるハムスターの継続飼育からの再スタートに変更したことは、一定の効果があったといえることができる。これらのことから、ゼミでの活動を通じて2人の学生は、保育者に必要とされる保育者自身が生き物や動物に親しみ、愛情をもって関わり、「命」の大切さを子どもたちに伝えていけるような保育者の資質を育んだといえる。

ゼミでの継続的な動物飼育の経験を通して学生の中に見られた変化は、いずれも動物への親しみ、愛情が増していることを示している。ハムスターの飼育をある一定期間行うことにより、もともとハムスターが好きだった学生はよりハムスターを好きになり、苦手意識のある学生は自ら触り飼育することができるようになった。また、2人のインタビュー調査が示しているのは、この継続的な飼育によって、保育者自身が生き物や動物に親しみ、愛情をもって関わり、「命」の大切さを子どもに伝えていけるような保育者の資質が育まれているということである。

しかし、全員がダンゴムシやハムスターや他の生き物に愛情をもって親しめるようになり、将来子どもたちに対して保育者として生き物との深い関わりを見せることができるようになったというわけではない。個々の学生に差が見られたことが、このゼミの授業実践で残された課題である。今後、全員がより生き物や動物に親しめるような飼育方法を考え、授業内容の工夫が求められる。

このゼミの授業実践では、シラバス作成当初に計画していた保育現場の子どもたちの飼育体験と同様のステップ1（ダンゴムシやアリとの園庭などでの触れ合い）、ステップ2（アオムシやザリガニの継続飼育）、ステップ3（体温を感じられる動物の継続飼育）と進むステップ順とは反対に、学生たちはステップ3のハムスターの飼育からステップ1のダンゴムシに親しむ体験へと進んだが、ステップ2の変態するアオムシやザリガニなどの飼育体験は不十分であった。保育科の学生に対する授業実践の中でステップ3からステップ

1へと展開する中で、アオムシやザリガニと触れ合えるようなステップ2を加えることで、もともと生き物との触れ合いが苦手であったり拒絶的であったりする学生がより抵抗感の少ないかたちで生き物と次第に親しむことができるような授業展開のプログラムを作ることができるのか、実践を通して検討する必要がある。また、その際に短期大学の1年間のゼミの授業期間でステップ2をいかにして効率的に授業計画に組み込むか、授業展開方法を探る必要がある。

6. 結論

本研究では、問題提起として、①学生が動物との触れ合いや世話を通して、保育者を志望する学生に必要な「命」と向き合うという経験をどのような方法で進めたのか、②この授業を通して、学生にどのような変化が見られたのか、③実際の授業展開に応じて授業方法がどのように変化したのか、という3つの問いを立て、保育者養成プログラムとしての生き物の継続飼育の意義と課題と可能性を示すことを研究目的としている。

①の動物の触れ合いや飼育経験に関する問いについては、短期大学の学生と保育現場の子どもたちの違いが明確になった。学生が動物との触れ合いや世話を通して、保育者を志望する学生に必要な「命」と向き合うという経験を、シラバス作成当初は保育現場で効果が実証されていたステップの1のダンゴムシから順にステップ3のハムスターへという順番で進めようとしたが、ダンゴムシに対して拒否反応を示す学生も多かった。そのため、子どもたちのためのステップ順とは反対の、ステップ3のハムスターからステップ1のダンゴムシへという順番での再スタートを試みると、ほとんどの学生はハムスターに触れることができた。しかし、ハムスターに対しても抵抗感のある学生もいた。ここで教員は苦手意識や抵抗感の残る学生を動物から遠ざけるのではなく、むしろ、どの学生もハムスターと触れ合える機会がもてるように、飼育を複数の学生が組んで行う当番制にした。生き物が苦手だった学生も、飼育当番を任されてハムスターとの関わりが深まるにつれ、徐々に愛着が生まれ、名前を呼び言葉を掛けてから行動に移すようになるなど、小さな「命」と無理なく向き合えるようになっていった。

③の問題提起に関して、授業展開の方法では大きな変化があった。子どもたちのステップ1のダンゴムシから順にステップ3の体温を感じるハムスターと考えたが、ステップ1ですでに抵抗感のある学生がいたため、学生の様子に合わせ、子どもたちとは反対のステップ3の温かみがあり反応がよくわかるハムスターの飼育から試みるように変更した。

最初は淡々と世話をする様子が見られ、自分本位に抱こうとしたり糞尿の始末を嫌がったりしていたが、飼育当番を重ねていくとハムスターの立場に立っての発言が聞かれるようになった。そのことから、授業展開の方法の変化は、妥当性をもつことが示された。

この変化に呼応して、②の問題提起に関しても、学生自身の動物との関わりや意識に変化が見られた。ステップ1のダンゴムシやアリなどの飼育からステップ3の温かみがあり反応のあるハムスターの継続飼育に変更したことで、学生が動物に興味・関心をもち関わりを深めることができ、心の変化も見られたことが示された。また、ハムスターに抵抗感のあった学生も、友達の影響や触れ合った時の心地よい感触を体験したことで、ハムスターに自ら声掛けをして飼育を嫌がらずに行い、ハムスターに親しむ姿が見られるようになったことが示された。さらに、卒業生へのインタビュー調査によって、卒業後も、このゼミの授業で培った生き物や動物を思いやる気持ちや触れ合うことを大事にとらえる気持ちは途切れることなく持続されていることが明らかになった。

これら3点の問題提起に関する本研究のそれぞれの結論が示しているのは、個人差はあるもののこのゼミを受講したすべての学生が継続飼育活動の体験を通して、愛情をもって生き物や動物に親しみ、子どもたちに「命」に触れ合える環境を提供できる保育者となるための下地を育んだということである。今後は、個人差があることを認めた上で、どの学生も「命」に触れ合うことを通して子どもたちが多くのことを経験できるような保育者になっていくために、さらに授業実践を見直す必要がある。

特に重要だったのは、保育者養成課程のゼミの授業を、保育現場の子どもたちのためのステップ順とは違って、ステップ1のダンゴムシとは反対のステップ3の温かみがあり反応のあるハムスターの継続飼育に変更し、あらためて動物と触れ合う活動に取り組んだ結果、学生に大きな変容が見られたという点である。ハムスターを好きな学生はより好きになり、抵抗感をもった学生もハムスターを触るとふわふわしていて気持ちがいいことに気付いたことから、自ら世話をするようになった。どの学生もハムスターの継続飼育を通して愛着を抱き、思いやる気持ちの変化が見られた。このことは、ハムスターほどではないが、ダンゴムシとの関わりにも見られた。また、保育者養成校のゼミの授業で培った小さな「命」と出会い、大事にしようとする思いは、卒業後のインタビュー調査からも分かるようにも現場で生き続け、子どもたちとの関わりの中で活かされていることが明らかになった。

これらのことから、ステップ順を当初の計画とは逆にして、ステップ3の温かみがあり

反応のあるハムスターの継続飼育からの再スタートに変更したことで、学生たちは抵抗感が低くなり、動物との関わりを次第に深めていくことができたといえる。この経験を通して、学生たちは「命」と向き合う大切さを感じ、子どもたちに「命」の大切さを伝えていけるような保育者の資質の土台を育んだ。

学生たちは、ステップ3のハムスターの継続飼育からステップ1のダンゴムシを身近に感じ親しむ姿が見られるようになったが、全員が動物全般に対して全面的に親しめるようになったわけではない。また、学生たちは、ステップ3のハムスターの飼育からステップ1のダンゴムシに親しむという体験に進んだが、ステップ2の変態するアオムシやザリガニの飼育体験が不十分であった。今後の課題として、保育科の学生に対する授業実践でステップ3からステップ1へと展開する中で、アオムシやザリガニと触れ合えるようなステップ2を加える授業展開のプログラムを工夫し、実践を通して検討する必要がある。また、短期大学の1年間のゼミの授業期間で、ステップ2をいかにして効率的に授業計画に組み込み、ステップ1のダンゴムシまで進むことができるような授業展開を図ることができるか、授業方法を探る必要がある。短期大学の保育者養成課程において、学生たちが一人ひとりの個人差はあっても、動物に対する拒絶の姿勢がなくなり、主体的に生き物や動物に親しむという保育者の資質を育んでいけるような授業実践のプログラムづくりと、その検討が、今後の課題である。

参考・引用文献

- ・文部科学省, 2017, 「幼稚園教育要領」フレーベル館, pp17-19.
- ・厚生労働省, 2017, 「保育所保育指針」フレーベル館, pp26-27.
- ・内閣府, 文部科学省, 厚生労働省, 2017, 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館, pp29-30.
- ・榎戸裕子, 2018「継続飼育と子どもの心の育ち－幼稚園における「命」を大切にするとりくみ－」名古屋柳城短期大学研究紀要第 40 号 pp171-187.
- ・中島由佳, 中川美穂子, 無藤隆, 2009, 「学校での動物飼育の適切さが児童へ心理的発達に与える影響」日本獣医師会誌 64, pp227-233.
- ・宮川保, 2006, 「学校・園での動物飼育の成果～心・いのち・脳を育む～」全国学校飼育動物研究会 pp171-174.

What Childcare Students Have Learned through Experience of Continuous Breeding

Enokido, Yuko*

本研究に先立つ筆者の研究（榎戸，2018）で、保育現場での「身近な生き物との関わり」をテーマにした取り組みを、子どもたちの発達段階に合わせて、ステップ1（ダンゴムシやアリとの触れ合い）、ステップ2（アオムシやザリガニの継続飼育）、ステップ3（体温を感じられる動物の継続飼育）と進んだ結果、筆者は、保育者養成校において、子どもたちが生き物や動物に関わって「命」の大切さを伝えていけるような保育者になることを目指す必要があるということを明らかにした。

よって、本研究では、保育者養成校の保育科に通う学生を対象にしたゼミナール（本学では「教職実践演習（幼稚園）」として開講されている）の授業展開をステップに則り進めることを通して、卒業までに、子どもたちに生き物や動物に愛情をもって関わり、「命」の大切さを伝えていけるような保育者の資質を引き出すことを研究目的とした。この研究目的を達成するために、次の3つの問題を提起した。

- ① 学生が動物との触れ合いや世話を通して、保育者を志望する学生に必要な「命」と向き合うという経験をどのような方法で進めたのか。
- ② この授業を通して、学生にどのような変化が見られたのか。
- ③ 実際の授業展開に応じて授業方法がどのように変化したのか。

学生の姿に合わせ、子どものステップとは反対に、ステップ3のハムスターの継続飼育からに変更したことや飼育を当番制にしたことで、学生がハムスターに興味・関心をもち関わりを深めることができ、心の変化も見られたことが示された。さらに、卒業後も、このゼミの授業で培った生き物や動物を思いやる気持ちや触れ合うことを大事ととらえる気持ちは途切れることなく持続されていることが明らかになった。しかし、全員が動物に対して全面的に親しめるようになったわけではない。ステップ2のアオムシやザリガニの飼育体験も不十分である。

短期大学の保育者養成課程において、主体的に生き物や動物に親しむという保育者の資質を育ていけるような授業実践のプログラムづくりと、その検討が、今後の課題である。

キーワード：継続動物飼育、保育学生による継続飼育、保育者の資質、命を感じる教育

*Nagoya Ryujo Junior College